

島にアートがやってきた



オンパ・ファクトリー
写真：中村 脩



うちの骨の家／西堀隆史
写真：中村 脩



漆の家／漆の家プロジェクト
写真：中村 脩



思い出玉が集まる家／
川島 猛とドリームフレンズ
写真：中村 脩

僕たちの住む男木島は、高松市の沖合、約八キロメートルに位置する、周囲五キロメートルの小さな島だ。高松港から「めおん」というフェリーに乗って約四十分で男木港に着く。人口は約二百人で、そのうち約六十パーセントが六十五歳以上の人だ。僕たちの中学校は全校生が三年生三人だけで、小学生はいない。

島内に平地と呼べる場所はほとんどない。海岸からすぐにはじまる急斜面に、民家が密集して建ち並んでいる。そのすき間を縫うようにある坂道は、細く曲がりくねり、迷路のようになってい

る。主な産業は漁業と畑を使った農業だ。

島の北端には、一八九五年に建設された御影石（花崗岩）づくりの灯台がある。今も一日に千二百隻の船が行き交う備讃海域の安全を現役で守っている。

こんな男木島に二〇一〇年、十万人もの人がやってきた。

「瀬戸内国際芸術祭二〇一〇」が「海の復権」をテーマに七月十九日から十月三十一日までの一〇五日間、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島および、高松港周辺を会場に開催されたのだ。来場者数は、約九十三万八千人。十八の国と地域から七十五組のアーティスト・プロジェクトと十六のイベントが参加した。

この芸術祭を通して、僕たちのふるさとに対する思いは大きく変わった。

男木島が開催地の一つに選ばれ、ディレクターさんから、「アートで島は元気になります。男木島のすばらしさ、瀬戸内海の魅力を世界に発信しましょう。」という話を聞いた。どうもスケールが大きすぎるので、島の人たちも「話半分で聞いとつたらええやろう」と思っていた。

「アートって何や？そんな新しげなもんが、こんな島にあうんか？」

「高松からでもそんなに人や来んのに、全国や外国から、わざわざ男木に来るとは思えんの。」「わけのわからんおかしげな人が来たら困るぞ。」

島の人たちは、皆それぞれにとまどうばかりだった。

一月の日曜日。こえび隊（ボランティアサポーター）七名が乗った「めおん」が港に到着。トラックに積み込んである資材を空家まで手作業で運び、午後は、空家の大きな家具やすごい数のゴミを港のトラックまで運んだ。その後も、展示に使う空家を何日もかかってきれいにしてくれた。

アーティストの制作過程を見たり、こえび隊の人たちと一緒に制作のお手伝いをしたりと、いつの間にかアートが僕たちの身近なものになっていった。

約六千枚のうちわの骨で覆った「うちわの骨の家」は、もと駄菓子屋だったこともあり、制作中は島の人々が懐かしがって立ち寄り、昔話に花が咲いていた。また香川の漆芸家たちによる「漆の家」や香川出身の川島猛さんの「想い出玉の集まる家」など、何年も使われていなかった空家が姿を変え、人々の集まる場所になっていった。

路地には、カラフルな壁画が現れ、バケツやたらいから雨が降ったり、数十メートル離れた先から人の声が聞こえるパイプが顔を出したりしている。

現代アートと一緒に見る島の風景は、はつとするほど新鮮で美しく、また、一つひとつの作品がぴったりとその場所に溶け込んでいて不思議な感じがした。

なんとといっても、島の人々に喜ばれたのは、香川在住の作家五人が開いた「オンバ・ファクトリー」だ。オンバ（乳母車）は、坂道だらけの男木島では、ものを運搬するにはなくてはならないものだ。島の人が使っている古いオンバを改造したりペイントしたり無料で作り替えてくれるのだ。カ

ラフルなオンバをうれしそうに押ししているおばあさんを見ると、こちらまで楽しくなってくる。用事がなくてもオンバをみんなに見せるために押ししているのではないかと思うときもある。

「どうもディレクターさんの言っているのは本物らしいぞ。」

「男木島が笑われんようにせんと。」

「ようけ来てくれたらええの。」

「たこ飯を作ったら喜んでもらえるかな。」

島の人たち皆が、島にやってくる人たちのために本気でアイデアを練っていた。

僕たち中学生も「島こころ椅子プロジェクト」に参加し、豊玉姫神社の拝殿前に「海の幸と山の幸」をテーマに椅子をつくり並べた。また、初めて島を訪れる人たちが歩きやすいように手作りのガイドブックを作り、配ることにした。外国から訪れる人のために英語版も準備した。

そして、一年前には想像もなかった時間が過ぎていった。ディレクターさんの話のとおり、ほんとうにびっくりするほどたくさんの人が男木島にやってきた。

「こんにちは。」

「こんにちは。どこから来たんな？」

「東京からです。」

「まあまあ、遠いところから、ようおいでたなあ。」

「とっってもいいところですね。」

「そうな。ありがとう。暑いから気いつけてな。道はわかるかな？」

「はい。ありがとうございます。」

いつもは不便な狭い路地も、一休みする坂道も、言葉を交わすのにはちょうどよかった。島のあちこちで笑顔があふれた。

僕たちの作ったガイドブックも好評で、追加の印刷をした。

たくさんの人に支えられて、十月三十一日、瀬戸内国際芸術祭二〇一〇は閉幕した。

その後の話も少し聞いてほしい。

二〇一一年三月。僕たち三人の卒業式の後、男木中学校の休校記念式が行われた。多くの島の人が中学校の思い出を振り返り、休校を惜しんだ。時代を追った写真の上映とともに、こえび隊による音楽隊が「ふるさと」や「仰げば尊し」を演奏してくれて、みんなで合唱した。

五月。男木島で三十二年ぶりの結婚式が行われた。瀬戸内国際芸術祭に来たカップルが「こんなすばらしいところで結婚式が挙げられたらいいね。」と言ってくれて、実現したのだ。島の人たちが段ボールで長持ちを作り、「男木伊勢音頭」を歌いながら、新郎新婦の後ろに付いて島内を練り歩いて祝福した。

芸術祭の後、そのまま島に残り、活動を続けるアーティストもいる。その人たちの呼びかけで、地引網やびわがり、盆踊りなどいろいろな人に男木島に来てもらって、島の人たちとの交流が広がっている。

芸術祭を通して、僕たちは、改めて男木島のすばらしさに気づくことができた。僕たちは、二年後の瀬戸内国際芸術祭をとっても楽しみにしている。